

第8回京都建築賞 藤井厚二賞部門 意見交換会

参加者：審査委員：垣内光司、長坂大、平塚桂（50音順）

前審査員：魚谷繁礼

懸賞委員：高木伸人、高橋勝、橋本政樹、佐久間譲、藤原出



ー 藤井厚二賞は、若い頑張っている人たちに如何にスポットを当てるかを念頭にしてスタートしました。なぜ藤井厚二なのかと言うと、京都ゆかりの人であるというのがありますが、強い思いを持って挑戦的な姿勢で新しい建築作品を作り出した存在であるからです。藤井厚二といえば環境住宅の取り組みが有名ですが、この賞では「藤井の建築に取り組む姿勢や情熱の方を重視したい」という思いがあります。

この賞は「テーマ」を設定することになっていますので、意見交換の後に「テーマ」を設定していただければと思います。

垣内 京都建築賞と藤井厚二賞は、やっぱり全然違う様な賞になればと思っています。藤井厚二賞の認識として、京都建築賞の新人賞部門ではないし、そうしたくはないですね。

藤井厚二賞という大看板は大切なんですけど、僕が個人的に思うのは、「藤井厚二賞の答え合わせ」にはしない方がいいかなと。藤井厚二賞ばいよね、というものが評価されるのは違う気がします。

環境住宅と言っても、今の時代の性能と比べると聴竹居は、もう快適とは言えないか

もしれない。それでも魅力的なのは、彼の実践的な合理性を積み重ねた上で、すべてを合理で語られないところで非常にオリジナリティのある意匠に到達しているからだと思う。合理を積み重ねながらも一種の不合理的な表現にたどり着いているというのが、僕の勝手な見方の藤井厚二らしさかなと。

なので、いろんな合理を積み重ねた人がオリジナリティをもった意匠性に到達している建築に出会えたら僕は楽しいかな。



長坂 テーマが決められた賞というのは珍しいと思う。「テーマに沿った優秀さの指標が示されていて、それを評価するのか」それとも、「若くても頑張っている建築を造っている人を見ようよ！という感じの姿勢についてテーマとっておくのか」どっちなのかな？

垣内 初めからテーマを決めると応募者を絞るだけになってしまうのでは？

— 漠然と「藤井厚二賞」と言われるよりも、テーマがあったほうが、普段こういった賞に応募しない人でも自分の取り組みに近いテーマだなと感じる事があれば応募してくれるのではないかと期待を込めています。応募者を絞りたいのではなくて、掘り起こしたいという意図からです。

平塚 なるほど。垣内さんは2018年の藤井厚二賞を受賞されていますが、応募されたときはテーマ「木」を意識されましたか？

垣内 してないですね（笑い）。テーマへの対応は作品の説明の仕方でも出来ると思います。テーマってそういうもの。解釈の問題なので、あとは審査委員がそれを受け入れるか否かの問題。

長坂 藤井厚二賞と言ったときに、「環境」のような事が常にあるんだとすると、「環境」の解釈を巡って毎年論点が違うというのもいいのかなとも思います。「環境」というテーマが良すぎるので、環境の解釈を替えていって「環境〇〇」とか「環境2」とか（笑い）



— 毎回、審査委員の方に訊いているのですが、藤井厚二の印象や作品に思うこと、どういった作品の応募を期待するかについてお願いします。

長坂 やっぱり、そういう事言わなきゃだめかな？
そういうのあまりないんです（笑い）

垣内 さっき言った合理とか理屈とかの積み重ねが、その人のオリジナリティにつながっている建築や建築家に会いたいなと思います。

平塚 設計者でもないのに審査をするのはおこがましいという気持ちもあり、せめて理解を深めようと、少し藤井厚二について勉強してきました（笑い）。そ

の成果をお伝えすると、藤井厚二は「愉快」という言葉がお好きなようで、藤井が書く文章によく登場します。『住宅に就いて』という本の書き出しも「私は永い以前から吾々の住宅をもっともっと愉快的便利な而して楽しいものにしたいと思っておりました」という、すごく天真爛漫な言葉から始まります。「自分にとって、愉快で便利で楽しい場所をつくりたい」というのが建築の出発点という印象が先ずあります。

また温度のグラフで京都の環境を相対的に論じていますが、比較対象には北欧など藤井が世界を廻って体感した場所の気温が選ばれており、自分の快不快原則から始まっていると思われます。

だから環境工学といっても現代の環境配慮の意識として一般的な「環境に優しくしたい」という感覚はおそらなくて、むしろ「自分を取り巻く環境を優しい状態にしたい人」じゃないかと。その出発点が面白いと感じます。

長坂 「自分に優しい」というのはどういうことだろう？突っ込んでしまう。例えば、聴竹居のアーチになっているコーナーの部分と普通の部分の組み合わせが、僕のなかでいつまで経ってもよく解らない。いったい何を考えていたんだろうといつも思っていたので、「藤井厚二賞」といわれても実は困ってしまったりもするんだよね。

垣内 僕はそれが魅力だと思っています。その理解出来ないことを応募者がすくなくとも説明して欲しいと。ぱっと見て理解できるものよりも、一見理解できないものでも応募者が、本人なりに説明してくれる様が非常に魅力的かどうか重要だと思う。なので、何年経っても聴竹居がなかなか理解できない事が藤井厚二のオリジナリティであるし、魅力なのではないでしょうか。

平塚さんが言われてたように、結構自己中心的じゃないかというのも魅力だなと。

平塚 自分で考えた筋の通り方ですね。

垣内 そうですね。彼なりの合理や理屈が、藤井の言う「愉快」という言葉に含められている気がします。

長坂 「愉快」という言葉は面白いかもしれないね。

— 「愉快」というのは楽しいというだけではなくて腑に落ちるとかスカッとするとかそういう意味合いもありますね。



平塚 藤井厚二は当時の建築潮流の閉塞感や形式性に対して疑問を持ち、それを打ち破ろうとしていたようにも感じます。藤井が活躍した 1920 年代は、洋風住宅が大衆化した時期でした。しかし藤井は「洋風の部分は社交の為の飾り物」と一蹴するなど、西洋の形式を自分の頭で考えずに受け入れることに抵抗を持っていた印象がありますね。

長坂 実は、聴竹居をあまり良いと思ってないんですよ。聴竹居を見に行ったら疑問だったのは、いわゆる日本の縁側があって庭があってそれらが繋がっていると言われていること。全然繋がってないと思っていて、ガラスがあって腰壁があって外とはきっちり仕切ってるし、どこが良いのかよく解らない。みんな良いと言ってるけど、ほんとにそう思っているのかな？

むしろ、スタイルに関して言うと、あの微妙なよく解らない和風、周りに建具が全部回っているとか、奥の洋風のアールデコのようなもの。「これをやりたかったんだな」というのは、すごくよく解る。それはよく解るけど、藤井の建築、聴竹居が環境住宅にカテゴライズされているとなると、再び解らなくなる（笑い）。全然違うのではないかな。温熱環境についての快適さの追求という指標を支持するということにはならないと思う。

環境から建築を考えるというのは好きなほうですが、僕にとっての環境とは一番は地形。あと気候が大きいかもしれないけど、やはり、その場のフィジカルな状況が大きいと思う。「環境」をテーマにして審査するのであれば、さっきの話題にあった、何が楽しいか、何が愉快かという事までは募集要項では言わなくていいんじゃないかと思う。応募者が自分はこれが楽しいと言ってくればいい。それに対して責任をとっている程度を審査員が見ていくと言う感じでやっていけばよいでしょう。

— 去年は環境の解釈を絞らずに、温熱環境だけではなくて社会環境などソフト・ハード両面を広く捉える、解釈自由な意図で募集しました。応募作品の中には、時間を環境と捉えていたり、既存の建築を環境と捉えていたり、独自の解釈の環境に向き合ったものがありました。もちろん温熱環境をテーマとしたものもありました。

垣内 「愉快」という言葉の中にそれぞれのオリジナリティが含まれている気がします。それをプレゼンで説明してもらえればと思います。

平塚 藤井の追求していた環境とは自分の半径5mくらいの範囲のものだと思います。聴竹居も半径5mくらいを徹底的に整えているし、地中に管を通して冷気を運ぶなど、その小さな建物に対して設備は極端にオーバースペックで、その執念や強引さも魅力です。

垣内 そうですね。圧倒的なオリジナリティ、それこそ半径5mの環境に特化した自己中心的なものの応募があれば嬉しい。

長坂 そこで気をつけたいのが、毎年学生に言っている事があって、「好み」と「レベル」は違うということ。好みを追求するあまり、突っ走ってしまってレベルが伴わなくなってしまう学生が一定数います。同時に審査員も新しさを理解できるかが問われているわけですが。

「愉快」といえば、映画や物語のタイトルで「〇〇と愉快的な仲間たち」というのがあ
るけど、その愉快は、楽しいというのではなくて、なにか能力がある仲間という事が多
いように思う。また「愉快犯」という言葉もあるけど、その場合の愉快はある種のアン
チを表現していると思う。

平塚 作り手の「愉快」、そこにいる人の「愉快」。藤井厚二の執念のような物で「愉快」
が現れていると思う。

長坂 また、愉快と言っても刹那的な現象ではなく、一定の時間に耐えるものでなくては
だめだと思う。

垣内 建築の後始末、終い方まで考える「愉快」というのもある。

長坂 建築は設計者や当初の利用者の意図を超えて、そこに在り続けることもあるので、
終わることまでを考えてしまう事は傲慢じゃないかな？

愉快なのが、1年なのか、10年なのか、もっとなのか？時間の設定も重要。

平塚 なるほど。昔は地球規模のサイクルで環境を捉える視点がなかったので、藤井厚二の環境工学は近視眼的なところがありますが、今の時代に「愉快」だと思えるためには、自分の感覚に基づく愉快さが出発点でも、広い視野でうまくまわっていないと説得力がないですね。

— これまでのお話をまとめると、今回のテーマは「愉快的環境」ということでしょうか？

長坂 良いですね。(垣内、平塚両氏頷く)

— 今回は非常に斬新な解釈、切り口が示された様に思います。「愉快的環境」をテーマとした多くの作品が応募頂ける事を期待したいと思います。
皆様、本日はありがとうございました。